

# 成願寺

季報

124

令和2年6月18日  
(2020年)

目次

「コロナに思う」鈴木一馨	1
春彼岸法要の報告	5
中野区立みなみの小学校社会科見学に来山	5
日本オマーン学生交流会の報告	6
山内短信	8

発行 多宝山成願寺  
〒164-0012 東京都  
中野区本町 2-26-6  
電話 03-3372-2711  
制作 地人館

コロナに思う

鶴見大学准教授 鈴木一馨

成願寺季報をご覧のみなさまこんにちは。本来でしたら、この夏の盂蘭盆会法要でお話しをさせて頂くはずでした鈴木と申します。

成願寺様の盂蘭盆会にお伺いするようになって、かれこれ二十年ほどになります。じつはそれより十年ほど前、ですから今から三十年ほど前にも、いちど師匠（父ですけれども）に連れられて、盂蘭盆会にお伺いしたことがあります。古くから、成願寺様の盂蘭盆会や参禅会にご参加なさっている方は、盂蘭盆会の説教や参禅会の指導をしていた鈴木格禅という僧侶をご存じかと思えますが、それが私の師匠であり父です。

その父が亡くなった翌々年に、方丈様から「盂蘭盆会の時に三回忌の法要をするから参加如何」とお

## 当山における新型コロナウイルス感染症の対応

- ・ 普段通りにご参拝いただけます。門戸を閉じることはありません。（朝六時開門〜夕五時閉門）
  - ・ 各種坐禅会は七月中は休会。写仏会、仏像彫刻の会、沖繩空手道場は休会しておりますが、六月より再開いたします。（詳細は当山ホームページまで）
  - ・ 毎月十八日の観音様の縁日祈禱は通常通りに行いたします（秋の観音詣りは未定です）。
- 来山の際は体調を考慮の上、マスク着用、手洗い、咳エチケットなどにご協力いただき、感染防止にお努めくださいますようお願い申し上げます。

## 墓地の管理について

当山墓地に何年もの長い期間お参りがなく、墓地管理に対する付け届けが無い、連絡の付かないお墓があります。該当の墓石に立て札を設置しました。心当たりの方はご連絡をお願いします。

誘いをいただき、それ以来毎夏お伺いしていますが、数年後には「お父さんのように、あなたも孟蘭盆会で説教しなさい」と言われるようになり、今年、説教デビューするはずでした。ところが、新型コロナウイルスウィルス感染症の蔓延により、残念ながらこの夏の孟蘭盆会の大法要は中止となり、ついでにはわたしのデビューもお預けとなつてしまいました。

ついでのことながら、わたしの肩書が「鶴見大学准教授」となっていますが、これもこの春になつたばかりです（三月までは民間の研究所の研究員でした）。ところが学生が通学できず、まだ担当の学生といちども顔を合わせていないため、こちらも本格的なデビューはお預けの状態です。もつとも、会つたこともない学生とやれ履修の相談だ、やれ卒論の指導だとやりとりもあつて、なんとも不思議な感じがしています。

さて、この新型コロナウイルスの流行によつて、わたしたちの生活はずいぶんと様変わりしてしまいました。いま、街中を見てみれば、多くのひとがマスクをして歩いていますし、車を運転中のドライバーもマスクをしています。新型コロナウイルスの情報、一月八日頃から徐々に増え始めたのですが、

二月に入ると風邪やインフルエンザ、また今年は例年より早く始まった花粉の飛散との関係もあつて、マスク姿が急激に増えました。三月の半ばにはマスク不足となつて、みなさまも確保に苦労されたのではないのでしょうか。

ところが、新型コロナウイルスは、医療用の高密度マスクでない限りみんなマスクをすり抜けてしまいます。たとえば、ウィルスの大きさをテニスボールだとすると、一般のマスクの網の目は細かいもので三畳半ほど、ずいぶんとスカスカなものです。つまりウィルスそのものの侵入を防ぐ意味では、マスクはまったく役に立たないこととなります。

マスクが役立つのは、自分を守るといふ点では、飛沫感染（ウィルスを包んだ唾のしぶきが口や鼻に着いたり入ったりする）を防ぐことと、咽や鼻の湿気を保つことの二点です。また、他人に被害を与えないという点では、もし自分が感染していた場合に、飛沫を通して他人にうつさないというところにあります。

ところが最近、新型コロナウイルスの空気感染（唾のしぶきから湿気が蒸発して、むき出しで空气中をただようウィルスを吸うことによる）の可能性が指

摘されています。ただし、ウイルスはある程度の量が侵入しないと体内で処理されてしまいますので、空気の流れが起きないところほど感染・発症の危険は高くなります。そうになると、いくらマスクをしていても、ウイルスがただよう密室ならば意味がないこととなります。

いま日本で言われている「三密」つまり密集・密接・密閉のうち、密集と密接は飛沫感染から、これに密閉が加わると空気感染から自分を守ること意識されています。でも、もし自分が気付かずに感染していたら、ということ踏まえると、他人にうつさないという点でも大事なことになります。このとき、密集・密接ならば、「うつされない」「うつさない」の両方からマスクの必要もあるわけです。

逆に言えば、密集・密接が避けられる（たとえば他人と接近することがない屋外）ならば、マスクは不要ということになります。すでに、政府や医療団体などからも注意が始めています。これからの暑い時期にはマスクをすることによる熱中症の危険があります。そこで、「二密が避けられるのならば、マスクを外すように」と、これまで「マスクは絶対が必要」と一般に理解されていたことは真逆のこ

とが言われるようになりました。

ところでどうでしょう、いま街中の様子を見て、マスクをしていない人を見かけると「あれまあ！」「危険意識が低い！」と思わないでしょうか？ この四ヶ月のわたしたちの生活は、「マスクをするのが当然」というすがたに変貌しました。

二月に始まったマスク不足も、現在の「マスクをするのが当然」も、両方ともに「マスクをすればウイルスを防げる」という誤解にもとづくものです。ですが、わたしたちは、ひとたび「こうだ！」と思いついたものからはなかなか抜け出せません。

自分で思ったこと、ひいては自分自身から抜け出せないことを、仏教では「我執がしゆう」と言います。わかりやすく言うと「こだわる」ということです。「こだわらる（こだわり）」という言葉は、現在では「一途」「ひとすじ」といった褒め言葉のように使われることが多いのですが、もともとは「拘泥こうでい」つまり泥沼の中に脚を取られて抜け出せない様子を意味していて、決して良い意味で使われることはありませんでした。

それでは、我執はどこから生まれるのでしょうか？



それは、ひとつには強い自我（自己）の意識にあります。「マスクをすればかからない」と思うことが買ひ占めによるマスク不足を生み、「他人が」マスクをしなければ（わたしが）かかってしまう」と思うことが「マスクをするのが当然」という意識を生みます。その中心に強く自分がいることは、生きている上で避けられないでしょう。

もうひとつは、「正しさ」を理解できないことにあります。普段わたしたちは「正しい」ということを「自分の思いと一致する」とことだと意識していません。だとすれば「正しい」というのは、それだけで我執そのものだと言えるでしょう。

では、真に「正しい」とはどういうことでしょうか？ それは、「平らかにものを見る」つまり、漠然と、全体的に、ものごとの有りさまをながめ取ったときの、そのすがたです。このとき自我がはたらけば、必ず一点を

中心にして意味を捉えようとしみます。人それぞれに注視する点は違いますから、同じ有りさまを見ても意味づけは違います。この様子を理解すれば、自分の思いと一致することが「正しい」ということではないことが、おわかりになるかと思えます。

そもそもウイルスは自然のもので、それ自体にはたらしきがあっても意味はありません。意味づけをするのは人の意識です。だとすれば、「マスクをすればかからない」も「マスクをするのが当然」も、それが「自分の思いと一致する」ところで「正しさ」を自分の中に生み出しているだけで、真に「正しい」ということとは違うこととなります。

コロナウイルスをめぐるたくさんの偽情報に引つかかるのも、我執のなせる業の一つだと言えるでしょう。

すでにわたしたちは「コロナとの共生」の時期に入りつつあります。この「共生」を生き抜くためにも、我執を離れるのは大事なことはないかと思えます。

それではみなさま、上手くコロナと共生しながら、来年のお盆にお目にかかりましょう。

## 春彼岸法要の報告

春彼岸の入りにあたる三月十七日（火）、彼岸会法要が厳修されました。新型コロナウイルス感染拡大防止のため、檀信徒の皆さまには参列をご遠慮いただき、僧侶のみで例年同様のお勤めをし、各家先祖代々の供養をいたしました。



行道という丁寧な作法で読経する僧侶



ご供養された塔婆は僧侶の手により本堂に並べられます。

## 中野区立みなみの小学校社会科見学に来山

去る一月二十一日（火）、中野区立みなみの小学校三年生約七十名の児童と、六名の引率の先生が来山しました。みなみの小は、平成二十九年に中野神明小学校と新山小学校が統合して誕生した南台にあ



旧防空壕を見学し、先生のお話を聞く児童



本堂にて住職のお話を聞く児童

る小学校です。社会科見学の一貫として、中野区役所と中野サンモールを見学後、成願寺にやってきました。

最初に三つのグループに別れて、旧防空壕の見学へ。中程の部屋に子どもたちが入ると、先生の希望でしばらくのあいだ電気を消します。「戦争中は、この真つ暗な防空壕の中で、いつ終わるかもわからない空襲に耐えたのです」とお話がありました。

本堂に移動すると住職より、戦時中のお話や、お寺に伝わる近隣の古い写真の説明がありました。

最後に数人の児童から「戦争の怖さを知ることができて良かったです」「防空壕の中は電気が消えたら真つ暗で、体験できて良かったです」など感想がありました。

## 日本オマーン学生交流会の報告

昨年十一月二十三日（土）、日本に留学しているオマーン人の学生と日本の学生の相互理解や交流を目的として、日本オマーンクラブ主催の「日本オマーン学生交流会」が開催されました。当山は、国際交流の一助となればとの考えから会場を提供し、今回で七回目の開催となりました。



大使を見学される駐日オマーン大使



オマーン特産の銀製品と乳香

平成三十年より駐日オマーン大使を務められる、モハメッド・サイード・ハリファ・アル・ブサイディ閣下もご夫人と共に来山されて、交流会に参加。また、本堂などを見学されました。

大使より、オマーン特産の記念品を頂戴いたしました。

後日、会を運営した国際基督教大学中東文化研究会副会長の高橋篤史さんが「日本オマーンクラブ」のホームページ

に交流会の報告文を掲載されました。以下にご紹介します。

— ◆ — ◆ — ◆ —

十一月二十三日、中野坂上駅から程近くの成願寺付属中野たから幼稚園にて、毎年恒例の「日本オマーン学生交流会」が行われました。前年までは「日本中東学生会議」という学生団体が会の運営をしておりました。今年は、私が同団体に去年まで所属していた縁から、国際基督教大学の中東文化研究会が交流会を引き継ぐ運びとなりました。

互いに初対面の学生ばかりなので、始めに自己紹介を一通り行いました。そして、オマーン国自体についてあまり知識がないであろう日本人学生のために、オマーン人学生の方に一時間ほど写真やスライド資料を交えながらオマーンを紹介して頂きました。私自身、幼少の頃に親に連れられてオマーンを旅行したきりでしたので、当時の記憶と言えば綺麗な海と砂漠とラクダという程度でしたが、オマーン国の概観をよく把握できる良い機会となりました。

発表の後は学生を複数の班に分け、日本人学生からオマーン人学生に対して質問をする等の談話の時間としました。オマーンの代表的な菓子である「ハ



大使と住職を囲んだ集合写真

ルワ」の話が出た際、たまたま会の前日に「ハルワ」を食していたので嬉しかったものです。日本人学生にとって、有意義な時間となったことと思います。交流会には駐日オマーン大使のモハメッド・サイード・ハリファ・アル・ブサイディ氏とその家族が訪問して下さい、大使からはお話も頂きました。



坐禅体験する参加者

昼食を挟み、後半は日本人学生からの発表となりました。内容としては、地方都市（福岡県）、歌舞伎、日本

社会紹介といったところです。オマーン人学生の多くは来日してから時間が経っているであろうと思い、あまり主要ではない題材や日本の明るくない面も包み隠さず紹介できればとの思いがありました。発表の後は、前半と同様に、談話の時間を取りました。交流会の後は、東中野にある「キャラバンサライ包」にて夕食会を開きました。昼間には交わせなかった類の話が出来、雰囲気もとても和気藹々としたものでした。



旧防空壕の見学

その日の夜は成願寺さんの境内に合宿し、翌日の朝食後、オマーン人の学生達と共に坐禅を体験しました。歴史ある成願寺さんには三百五十年ほどになる九州鍋島家のお墓や第二次大戦の時の防空壕も保存されており皆で見学し、交流会を終りました。



鍋島家墓所の見学



## 山内短信

### ◎孟蘭盆先祖まつり供養会のご案内

七月十一日（土）十時より

御開山並びに歴代住職追善供養 引き続き

孟蘭盆会先祖まつり・檀信徒先祖霊位供養

・新型コロナウイルス感染症防止のため、僧侶のみでお勤めいたします。

・例年執り行われるお説教、檀信徒の皆様が参列しての供養会はありません。

・お塔婆、回向札は法要後に本堂全面に並べますので、各自お持ちください。



◎学習院大学文学部教育学科飯沼慶一教授、学生来山  
昨年十二月十六日（月）、学習院大学文学部教育学科の飯沼慶一教授と学生五名が来山し、中野たから幼稚園園児の引率を体験しました。将来は小学校の教員になるそうで、体験のあとは副園長と幼児教育に関わる意見交換を行いました。お寺では坐禅体験、旧防空壕の見学などを行いました。



◎日本リーテック㈱、中野第一小電気設備工事安全祈願に来山  
成願寺よりほど近い、旧桃園小学校跡地に中野区立中野第一小学校新校舎の建築が行われています。昨年十二月十七日（火）、新校舎の電気設備工事を担当する日本リーテック株式会社より九名が来山。工事の安全を祈願するご祈禱が厳修され、お札が授けられました。新校舎は来年春季竣工予定だそうです。



◎ご報告：去る二月二十日、副住職長男・小林堯成が、横浜市鶴見の大本山總持寺に上山安居いたしました。これより、三年々四年の修行を予定しております。上山前、「本山では厳しい修行になると思いますが、一人前の人として、また僧侶となれるよう、成願寺の後継者としてしっかり仏道修行に励みたいと思っております」と決意を述べました。